

# JOHA ニューズレター

第41号

## 日本オーラル・ヒストリー学会第19回大会 (JOHA19) 報告特集

日本オーラル・ヒストリー学会第19回大会(JOHA19)が2021年9月5日(日)に青森公立大学を開催校としてオンライン開催されました。

今回のニューズレターでは、会員みなさまに、このJOHA19のご報告をするとともに、3月5日締切の学会誌18号の原稿募集についてお知らせします。また、第20回大会の日程は2022年9月、会場は立教大学です。日付とプログラムの詳細は未定ですが、自由報告部会も予定しています。エントリー募集などについては、改めてメーリングリストや学会HP上でお知らせいたします。

### 【目次】

I. 日本オーラル・ヒストリー学会第19回大会報告	第9期・第10期合同理事会(2021年9月4日) 第2回理事会(2021年12月12日) . . . 14
1. 大会を終えて . . . 2	IV. お知らせ . . . 18
2. シンポジウム 兼 研究実践交流会「東日本大震災被災地域住民の語りと聴いて伝える活動」 . . . 2	1. JOHA 研究実践交流会 シリーズ「つながるオーラル・ヒストリー」第1回のお知らせ . . . 18
3. 第1分科会(震災・難民) . . . 3	2. 『日本オーラル・ヒストリー研究』18号原稿募集 投稿規定 . . . 19
4. 第2分科会(戦災・植民) . . . 4	3. 会員異動 . . . 20
II. 総会報告 . . . 5	4. 2021年度会費納入のお願い . . . 21
III. 理事会報告 . . . 10	

.....  
\*ニューズレター掲載のメールアドレスは、(at)部分を@に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

# Ⅰ. 日本オーラル・ヒストリー学会第19回大会報告

## 1. 大会を終えて

JOHA 第19回大会も、前回同様新型コロナウイルスの感染拡大にともない、オンラインでの開催となりました。当初予定では対面、オンラインの併用を考えていました。一つの指標としては8月に行われる「青森ねぶた祭」の開催の有無でしたが、この日本屈指の祭礼も2年連続の中止が発表され、その時点でオンラインのみに切り替えることを決意しました。青森の大学では、対面の授業が多くオンラインは不慣れでした。しかしながら大学関係者、大会補助の学生、そして多くの学会関係者の皆様のご助力で、なんとか開催をすることができました。この場をかりて皆様にお礼を申し上げたいと思います。

さて大会に関しては、ここ一年でオンラインの報告に慣れたこともあってか、昨年6名の報告者が今年は8名でした。また参加者も総計100名近くあり、昨年と同数程度にアクセスしていただいたようです。zoomを使用した議論にも前年度よりはスムーズ行われていたように思われます。しかしながら、機材トラブルなどは回避することはできず、開催校として課題が残った点もありました。次年度以降、オンラインの活用となった場合の参考となるようにしていきたいと思っております。

次年度はJOHAの第20回記念大会となります。来年こそは皆様と直接お会いできることを願っております。ご協力ありがとうございました。

(第19回大会開催校理事・佐々木てる)

## 2. シンポジウム 兼 研究実践交流会

### 「東日本大震災被災地域住民の語りと聴いて伝える活動」

2021年の今大会、JOHAは、初めてまとまった企画として東日本大震災をテーマに掲げる行事を開催した。震災から10年後であることに明確な意図や理由があるわけではないが、企画者(橋本)としては個人的に、長らく逡巡してきてようやく一歩踏み出せたという感慨がある。そして本企画を通して、多くのインタビュー実践者にとっては他人事ではないポイントをあぶり出せたように思う。すなわち、大災害であった3.11とその後の経験の語りにくさ、聞きにくさ、伝えることの難しさである。これに挑む活動が立ち上がり進み始めた実績、また被災当事者とその傍らに立つ人の対話が可能になってきた過程があり、またそこで新たに生まれた問いがある。今回のシンポジウムと研究実践交流会は、そうした営みの一環に位置づけたい。

前半のシンポジウムで、まず福島県及び岩手県の語りの現場から3本の報告をいただいた。青木淑子さんには「語り人活動の意義と活動を通して描く富岡の未来」と題し、NPO富岡町3.11を語る会の多彩な活動と、その背景となる福島県富岡町原発避難、住民の現状や思いを伝えていただいた。岩手県大槌町で震災・復興研究に取り組む坂口奈央さんは、「復興の中の葛藤、苦悩——地域の語りと生活者の論理」という題で、震災遺構をめぐる論争や報道、研究にまたがる問題状況を指摘。そして東日本大震災・原子力災害伝承館の小林孝さんからは、「伝承館が語り伝えたいこと」として、2020年9月に開館した伝承館の設立経緯や展示の改善の試み、語り部口演などの事業の紹介があった。

続いて2人のコメンテーターに、それぞれの異なる視点から語り・伝承の現場にかかわる話題提供を

いただいた。歴史学者の大門正克さんは、被災地での対話を図ったフォーラム開催の経験をふまえて各報告の意義や位置を震災後の大きな構図の中で捉え、また関根慎一さんは、報道の立場から、伝承館における語りが制約を受ける構造的問題について提起をされた。オンライン開催ゆえの技術的トラブルが発生し、完全な形で聞くことができない報告があったが、配布資料と音声による伝達でしのいだ。

短時間の質疑応答と休憩の後、スピーカーを核とする4つのグループに参加者が分かれて語り合う研究実践交流会を行なった。スピーカーの報告・コメントについてさらに突っ込んだやりとり、グループのメンバーがそれぞれ自分の活動・研究やそこで直面した聞きにくさや自らの立ち位置のもどかしさを吐露しての意見交換など、交流の展開はグループにより様々であった。

終了後の参加者アンケートでは、きちんと報告を聞きたかった、もっと語らいたかった、との感想が複数寄せられた。興味深い事例や重要な論点が盛りだくさんになり、消化不良が起きたかもしれない。また逆に、論争的なトピックについて議論を尽くせず、物足りなさを残したかもしれない。しかしむしろ、今回のテーマへの関心の高まり、または、トピックは違ってもオーラル・ヒストリーに携わる参加者同士のつながりの始まりになればと願う。東日本大震災という出来事は、当該被災地域固有のさまざまな傷跡、分断や問題状況を残し、それらへの接近の容易でなさを今も孕んでいる。それでも今回、語ること・聴くことを通じた活動・理解の可能性がまた一つ開かれた。10年後には、この間どんな接近ができたという報告が聞けるだろう。注目したい。

(研究活動委員・橋本みゆき)

### 3. 第一分科会（震災・難民）

第1分科会では「震災・難民」をテーマに、人が（国境をこえて）移動すること、社会の変動を経験することにまつわる語りの特徴をどうとらえていくかという4つの報告が行われた。Zoom上の参加者は44名で、大変刺激的な議論が展開され、質疑応答も盛り上がった。

第1報告王石諾「福島原発事故経験者としての在日中国人の女性のライフヒストリー」は、震災後の福島在住の日本人妻中国人を①「災害弱者」として一括りにすることへの抵抗、②移住前後、震災前後というように個人の人生を切り分けることなくライフを語る主体の内側から捉えることの可能性を提起するものであった。現代社会においては自らのライフを比較する対象が複雑化し、それに伴いたとえば「幸せ」という感覚さえ相対化されている状況などが指摘された。第2報告佐久川恵美「『徹底的に絶望する』ところから福島原発事故を捉える-福島県会津若松市における不安を語り合える場づくりを通して-」は、「徹底的に絶望する」という言葉を鍵概念として、いかにして「現実」を直観することが可能かを語りの場（教会ネットワーク）に着目して明らかにしていた。本当の知識とは何か、不安を「理解力不足」にすり替えず未来に向けて語っていくとはどういうことなのか、「痛み比べをしない」で自分の基準を持つとはどういうことなのか、など様々な論点が示された。絶望することさえも否定されかねない状況で、いかにして希望につながる言葉を紡いでいくかというひりひりとするようなライフストーリーの現場が紹介された。第3報告林貴哉「在日ベトナム系移住者の生活の中でのことばをめぐる経験」は、移動する人の視点に立つ対話論的な言語観（「地動説」的な見方）にもとづいたライフストーリー分析の視座を提起するものだった。どのような相手とどのような話題について対話してきたかに着目することによって、日本語能力を「ことばをめぐる経験」として捉え直し、これまでホスト社会側から「天動説」的に俯瞰されていた研究視野を転換させるものになっていた。第4報告沼田彩誉子「神戸

生まれタタール移民2世と1950～1960年代イスタンブール『理想の国民像』の相対化を目指して」も移民の視点からネーションを捉えるものであった。グローバリゼーションの中で、どこでも生きていく地動説的なライフと「理想の国民像」の相剋を豊富なインタビューデータから説得的に分析するものである。以上の4報告から、ライフストーリーを分析していく際に「存在論」な視点から捉え直すことが重要であることを改めて考えさせられた。

(滝田 祥子)

#### 4. 第二分科会（戦争・植民）

第2分科会は、「戦争・植民」をテーマに、4つの報告があった。地域社会の「トラウマ」を歴史として掘り起こし継承するさいの可能性と課題、ドキュメンタリーやフィクションという手法のオーラル・ヒストリーとしての可能性と課題、オーラル・ヒストリーがもつ豊富な内容を単純化せずかつ歴史修正主義に絡み取られることなく継承するための方法の模索などが論点となった。

第1報告の伊吹唯「地域社会によるオーラル・ヒストリーの継承の可能性と限界」は、2000年代におこなわれた飯田下伊那地域の満洲移民の聞き書きについて、満洲というトラウマを共有する者同士の閉鎖的関係を超えて、かつ豊富なストーリーを単純化せずどのように継承していくかについて、これまでの議論を批判的に整理して検討し、今後の課題を示した。質疑では、被害／加害におとしこめない体験をどのように理解するか、満洲移民をめぐる文学・映画・ドラマなどをどのように位置づけるかなどの質問がだされた。前者は、(近年、黒川開拓団をめぐる明らかにされたような)地域社会内部のジェンダーや性の問題をどのように考えるかという点も含み込んで考えるべきだと思われた。後者は、木川報告・山本報告にも通じる論点である。

第2報告の木川剛志「戦後混乱期横須賀に生まれた混血児のライフストーリーを描いたドキュメンタリー映画の学術的意味について」は、1953年に養子縁組でアメリカに渡った木川洋子さんの母・信子さんを探す過程で得たオーラル・ヒストリーから、横須賀市秋谷という都市空間の歴史をドキュメンタリーという手法で復元した試みが紹介された。ドキュメンタリーのアーカイブとしての役割や、女性史やフェミニズム研究をはじめ都市史研究、移民史研究などにも広がりをもつ、たいへん興味深い実践として受け止められた。地域社会にとって「トラウマ」的に認識されることの多い性売買の歴史を地域の人びと自身が語るという点では、満洲という地域のトラウマを地域住民自身が語るという第1報告とも響き合う内容であった。

第3報告の山本唯人「戦争体験の継承とフィクション物語」は、戦争体験の継承におけるフィクションの可能性と課題を理論と実践の両面から検討するもので、読者が感知しづらい「ナラティブの余白」を演劇や「心象画」がなぜ描けたのかが焦点となった。質疑では、時系列での語りやナラティブを制限していたのではないかという指摘とともに、文学や哲学、演劇論との交差の可能性が提示された。発表用資料には記載されていたものの報告では触れられなかった論点として、「事実」が歴史修正主義的に解釈されたフィクションにどのように対峙するかという点も重要だろう。

第4報告の橋場紀子「韓国人被爆者の語りから、多様な『被爆者像』を考える」は、先行研究に乏しい韓国人被爆者についての貴重なオーラル・ヒストリーの成果であるとともに、語り手と聞き手の関係性の変容や日本人被爆者の語りとの違いに注目し、「別様／多様な『被爆者像』」を描き出そうとしたものである。「反戦平和」に収斂されない語りの可能性を考えるという点では、第1報告と共通するし、ステレ

オタイプとは異なる多様な語りそれ自体がたいへん興味深かった。その一方で、植民地支配という全体の構造のなかで主体的な語りの意味をどのように解釈するかが、歴史修正主義に取り込まれないためにいっそう慎重であるべきだし、重要だと感じた。

(人見佐知子)

## II. 総会報告

2021 年度総会（第 18 回）

日時：2021 年 9 月 5 日（日）12：00～13：30

場所：Zoom によるオンライン開催

会長挨拶、議長選出（香川七海会員）の後、以下の議案が諮られた。

### 第 1 号議案 2020 年度事業報告

2020 年度（2020. 9. 1～2021. 8. 31）事業報告について、以下の諸点が報告され、了承された。

#### 1. 会員数の現状

前回学会以降、2021 年 3 月末までの新規入会者は 13 名（一般 6 名、学生他 7 名）。4 月以降の入会は、13 名（一般 7 名、学生他 6 名）あった。3 年間の学会費未納による自動退会者 9 名、自己申告退会は 5 名あった。8 月 31 日現在の会員は 275 名（前回 264 名）である。これは昨年同時期と比べ 11 名の増加である。

#### 2. 第 18 回大会（JOHA18）の実施と第 19 回大会（JOHA19）の開催

第 18 回大会は、2020 年 9 月 13 日に 1 日のみオンラインで開催した。自由報告が 2 つの分科会に分かれ 6 本が報告された。また、大会プレ企画として、9 月 5 日に「研究実践交流会 コロナ禍の「声」を記録する——オーラル・ヒストリーになにができるか」を開催した。

第 19 回大会は、2021 年 9 月 4 日、5 日の 2 日間、青森公立大学でのハイブリッド開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を鑑み、5 日の 1 日のみのオンライン開催とする。

#### 3. ワークショップ、シンポジウムの企画

2020 年 11 月 8 日に、JOHA 編集委員会主催実践ワークショップ「『良い論文』を書く」の第 1 回を開催し、以降、12 月 27 日に第 2 回、2021 年 2 月 11 日に第 3 回をそれぞれオンラインで開催した。

2021 年 3 月 14 日、千葉県旭市飯岡地域にて、NPO 法人光と風キャンペーン実行委員会の協力のもと、前年度延期となっていたオーラル・ヒストリー複合ワークショップ 2021 「作品と現地をオンラインでつなぐ『語り継ぐ いいおか津波』の現場を訪ねて」をオンラインで開催した。

2021 年 6 月 27 日には、歴史学研究会現代史部会、同時代史学会との共催で、前年度延期となっていたシンポジウム「戦争体験に関わる「二次証言」の可能性——福井県の歩兵第三六聯隊に所属した一農民の体験を事例に考える」をオンラインで開催した。

#### 4. 学会誌 16 号の発行と 17 号の編集・発行

2020 年 9 月に学会誌第 16 号を発行し、同月中にインターブックス社から配送した。17 号の編集作業は順調に進み、10 月の発行を予定している。

#### 5. ニュースレターの発行

ニュースレターは第 18 回大会後、第 19 回大会の前に、39 号（2021 年 1 月 21 日）と 40 号（2021 年 8 月 10 日）を発行した。広報委員長が編集を担当した。会員メーリングリストでの配信、ならびに学会 HP での公開を行った。

#### 6. ウェブサイトの充実

ウェブサイト (<http://joha.jp/>) を学会事務局と広報委員会が管理運営している。

#### 7. 会員相互の交流の促進

会員メーリングリストを通じた会員相互の情報発信が適宜なされている。

#### 8. 学協会誌の電子化事業

学協会誌の電子図書館事業が 2016 年度に終了となったことに対して、本学会では、2017 年より J-STAGE へ参加することとした。すでに手続きは完了し、JOHA15 号まで Web 上に公開されている。なお、費用などはインターブックス社と調整している。

以上

### 第 2 号議案 2020 年度決算報告

2020 年度（2020. 4. 1～2021. 3. 31）決算報告資料に基づき報告され、了承された。

### 第 3 号議案 2020 年度会計監査報告

岩崎美智子監事と倉石一郎監事より「会計帳簿、預貯金通帳、関係書類一切につき監査しましたところ、正確で適切であることを認めましたので、ここに報告いたします」と報告があり、了承された。

### 第 4 号議案 2021 年度事業案

2021 年度（2021. 9. 1～2022. 8. 31）事業案について、以下の諸点が報告、了承された。

#### 1. 会員の拡大と維持

新型コロナウイルスの感染状況を注視しながら、年次大会やシンポジウムなどを実施し、これらの情報を広報することで、本学会の周知に努め、会員数の拡大を目指す。会員の維持と会費収入確保のため、大会後、年内を目途に郵送による入金状況確認を行い、会費納入の督促を行うと同時に未納退会者を防ぐようにする。

## 2. 第 19 回 (JOHA19) 大会の実施と第 20 回大会 (JOHA20) の準備

第 19 回大会を 2021 年 9 月 5 日に Zoom によるオンラインで開催する。自由報告は 2 つの分科会に分かれ、8 本の報告を予定している。また、シンポジウム兼研究実践交流会として「東日本大震災被災地域住民の語りと聴いて伝える活動」を予定している。広報活動として学会 HP に掲載し、学会理事を中心に広報に努めている。

来年度の第 20 回大会については 2022 年 9 月に 2 日間開催予定。

## 3. 学会誌第 18 号の発行

学会誌第 18 号は、第 10 期理事会の編集委員会によって、シンポジウムと自由投稿をもとにして編集する方針である。また、学会誌の査読体制の変更など、誌面のさらなる充実化をはかる。

## 4. シンポジウム・ワークショップの開催

ワークショップとシンポジウムは、新型コロナウイルスの感染状況を注視しながら実施予定である。開催時期と内容は第 10 期研究活動委員会によって決定される。

## 5. ニューズレターの発行

JOHA19 後に大会報告を中心にしたニューズレター第 41 号を、JOHA20 前に大会プログラムを中心にした第 42 号の発行を予定している。

## 6. ウェブ情報の充実と改善

学会ホームページをさらに見やすく整備するとともに、適宜更新していく。

## 7. 会員相互の交流促進

学会 HP や会員メーリングリストの活用、ニューズレター配信を通じて、会員相互の交流を促進する。また、会員の出版、活動情報についても学会誌での書評等を通じて積極的に共有する。

## 8. 海外のオーラル・ヒストリー団体との交流

理事および関心ある会員を中心に、海外のオーラル・ヒストリー団体との交流を促進し、会員に情報提供を行う。

## 第 5 号議案 2021 年度予算案

2021 年度 (2021. 4. 1~2022. 3. 31) の予算案資料に基づき提案され、了承された。

## 第 6 号議案 理事選挙結果報告

2021/2023 (第 10 期) 理事選挙について以下の通り報告、了承された。

「学会会則」第 6 条 3 項 (理事の選出は年会費を払った正会員の選挙による。選挙規程に関しては、別に定める) および「理事選挙規程」に則り、2021/2023 (第 10 期) 理事を選出する選挙を実施しました。

2021年5月15日、立教大学にて選挙管理委員会を開催し、2021/2023（第10期）理事選挙（5月10日必着）の開票作業を行いました。投票状況は以下の通りです。

郵送による投票総数：76枚

白票による無効投票：2枚

3名以内連記の投票総数：221票

白票による無効投票：7票

選挙管理委員会は、選挙結果に基づき選出理事（上位8名）を確定しました。5月30日、選出理事をオンラインで招集し、理事の選定を行いました。その結果、2021/2023（第10期）理事会構成案が総会で提案されます。以下に、関連規定を掲げます。

参考：日本オーラル・ヒストリー学会理事選挙規程（省略）

日本オーラル・ヒストリー学会 2021/2023（第10期）選挙管理委員会（五十音順）

小松恵、橋本みゆき、矢吹康夫

#### **第7号議案 第10期理事会の承認**

理事選挙結果に基づき選出された第10期理事会が以下の通り提案、了承された。

理事選挙結果に基づき、選出理事（出席8名）を5月30日に招集し、以下のとおり、理事会のメンバーを選出しました（五十音順）。ご承認をお願いします。

蘭信三、大門正克、酒井朋子、佐々木てる、佐藤量、佐野直子、清水美里、謝花直美、梶本歩美、野入直美、安岡健一、山田富秋、米倉律、李洪章、和田悠（以上15名）

以下に関連規定を掲げます。

参考：日本オーラル・ヒストリー学会理事選挙規程（省略）

理事会構成員の互選の結果、以下の理事会構成案を提案します。

2021/2023（第10期）JOHA 理事会

会長：佐々木てる

事務局長：佐藤量

会計：李洪章

編集委員長：佐野直子

編集委員：梶本歩美、米倉律、酒井朋子、山田富秋



研究活動委員長：安岡健一

研究活動委員：蘭信三、清水美里、謝花直美、和田悠、大門正克

広報委員長：野入直美

監事：小林多寿子、赤嶺淳

## 第8号議案 学会奨励賞の創設について

学会奨励賞創設の提案に対し、受賞資格者の年齢制限と対象作品の形態について次のような意見が出された。

・在野で地道に女性史・地域史等を積み重ねてきた人たちの存在を考慮すれば、年齢やキャリアで制限を設けるのは適切ではない。

→柔軟に運用できるよう、規定の文案を「年齢制限については研究歴を考慮する」等にしてはどうか。

→提案されたものとは別に、若手奨励賞を設けてはどうか。

・対象作品は書籍と論文以外に、映像や演劇など多様なメディアに広げてもよいのではないか。

以上の議論をふまえて、本総会での採決は見送り、理事会で検討した後、臨時総会を開催してあらためて決議することとなった。

提案された奨励賞（案）は以下の通りである。

### 日本オーラル・ヒストリー学会奨励賞規約（案）

（目的）

第1条 日本オーラル・ヒストリー学会会則第2条の定めるところにより、オーラル・ヒストリー研究に関する、将来性に富み、奨励に値する、優れた研究業績を顕彰するため、日本オーラル・ヒストリー学会奨励賞（著書の部、論文の部）を設ける。

2 顕彰は2年に1回とする。

（受賞資格者）

第2条 受賞資格者は、出版時に年齢が45歳未満（書籍の部）／40歳未満（論文の部）の日本オーラル・ヒストリー学会会員とする。

（選考対象）

第3条 前条で定める受賞資格者が公刊した著書または論文で、以下のいずれかに該当するものを対象とする。

一 著書の部：単著書

二 論文の部：単著論文

（選考委員会）

第4条 本賞の選考を行うために、日本オーラル・ヒストリー学会奨励賞選考委員会を設置する。選考委員の委嘱は、理事会の議を経て、会長が行う。これに関する細則は別に定める。

(選考の方法および公表)

第5条 選考委員会は、受賞年の3年前の10月1日から前年10月末日までの2年間に公刊された著書および論文について会員の自薦・他薦を受ける。著書は出版社を問わないが、論文は『日本オーラル・ヒストリー研究』に掲載された投稿論文を対象とする。その上で作成された著作一覧をもとに、受賞対象を選考する。選考結果は、顕彰する年の7月末日までに、選考理由とともに理事会に提案され、理事会はこれをもとに受賞対象を決定し、総会において公表する。なお、選考方法の詳細は奨励賞選考委員会内規に定める。

(受賞対象件数)

第6条 受賞対象件数は著書の部、論文の部それぞれ2件以内とする。「該当なし」とすることを妨げない。

(規約の決定)

第7条 本規約の決定については、総会の議決を要する。

(付則)

1. 本規約は2021年9月5日より施行する。
2. 第1回顕彰については、過去4年間に発表された論考を選考対象とする。
3. 以後の変更については理事会の決定に従う。

### Ⅲ. 理事会報告

#### 第9期・第10期合同理事会報告

日時：2021年9月4日（土）15：00～

場所：オンライン開催

出席：赤嶺淳、矢吹康夫、上田貴子、塚田守、根本雅也、橋本みゆき、小林多寿子、山本恵里子（以上、第9期理事）、佐野直子、安岡健一、野入直美（以上、第9期・第10期理事）、佐々木てる、佐藤量、李洪章、梶本歩美、米倉律、酒井朋子、山田富秋、蘭信三、清水美里、謝花直美、和田悠、大門正克（以上、第10期理事）

欠席：能川泰治、今野日出晴

議事録作成：安岡健一

出席者確認

1. 前回議事録・議事録記載者確認  
確認した。

## 2. 会長から

赤嶺：残念ながら、今年も大会・総会がオンライン開催となった。明日、よろしく申し上げます。

## 3. 編集委員会報告

・会誌17号の論文について：投稿は合計11本。合計5本が採択。ワークショップを経たものが、そのうち1本。査読3回制を導入し、実際に3回査読したのは2本、そのうち1本が採択に至った。査読担当者の声として、教育的効果を考えるのであれば、3回制は有効だろうとのこと。一方、学会がそこまで教育を担わなければならないのか、という声も届いている。今後維持するかどうか、引き継ぎまでに検討して任期を終えたい。

・会誌17号の書評は6本。

・進捗状況について：執筆者が再校中。10月半ばまでの刊行を目指す。

・委託先について：編集・販売を委託していたインターブックスとの契約を再検討。今期・次期理事一部で相談し、委託を今期までとする案を提起したい。その後に出版社をどこにお願いするのは、次期の課題。

→これから複数見積もりして考えたい。

（質問）研活の企画の協力者（現地NPO）に一部謹呈してよいか。これからも企画協力者に謹呈する分の予算を確保しておいた方が良いのではないか。

→了解。

（質問）編集事務の補助をしてもらった人へのアルバイト料はどうするか。

→事務ではウェブ管理、会費督促などでアルバイトを雇用して活動している。17号では編集委員会でもアルバイトをつけた。17号分までは9期会計担当者が支出する。

→会誌の在庫について。インターブックス以外では会計と編集で預かっている。在庫管理は、今後の課題。

## 4. 研究活動委員会・大会開催校報告

### 4.1 2021年度 第19回オンライン大会

佐々木：頑張って開催するので、ご協力お願いします [事前登録は125名程度、会員以外2名から問い合わせがあった]。

橋本：9月3日にリハーサル実施。リハに参加できなかった人とは個別に連絡をとり、予行している。

・自由報告部会の開催形式について：各部屋担当者を確認[自由報告部会でも録音を行う]。

・発表資料の取り扱いについて

→グーグルドライブのURLを公開した場合、学会に来ずに資料だけダウンロードすることが可能になるが、それでよいか？

→誰でも参加できる会であり、望ましくないのでは。どうしても必要であれば、発表者に連絡が可能。

→発表の最後に、資料を再配信すればよい。

### 4.2 シンポジウム兼研究実践交流会

・グループ分けについて：5つのグループに分かれる。研究活動理事+赤嶺会長がファシリテーターとして参加。グループ分けについては、当初自動グループ分けを考えていたが難しいので、各自が自由に分かれる形式に。各グループで、交流の場とすることを目的に、内容は自由に話し合う（自己紹介だけにならないように）。ファシリテーターは記録のために録画をおこなう。最後の場では、話したい人が話したいことを話す。

（質問）参加者が100名以上と多くなるが、グループごとに凸凹するのは大丈夫か。（→開催校からグループ分けの方法について説明がなされた。）

（質問）録音方法について。どこに録音するのか。

→クラウドに記録する。[会議後に補足：グループセッションはクラウドに保存できないのでホストのローカルコンピューターに保存する]

（質問）事前申し込みの締め切りは設定しているか。

→していない

→リマインドをしておく。

（質問）次回大会はどうするか

→立教大学にお願いをしている。場合によっては他の選択肢も探す必要がある。せめてハイブリッドでやりたい。

## 5. 広報委員会報告

・次号NLについて 刊行は年末。開催校、シンポ担当者、編集・会計担当者、幹事等の原稿締切は11月末まで。自由報告部会については広報委員から連絡する。

（質問）部会の司会者に、字数や締め切りの連絡を

→報告前に連絡する。

（質問）ウェブサイトの更新は今後どうなるのか

→事務局でアルバイトを雇う。

## 6. 会計報告

・2020年度決算および2021年度予算：繰越金は220万円くらいで推移。編集関係予算が変動する。研活予算はすでに今年度分が動いている。印刷費はこれまでよりも増額を見込んでおく必要。

（補足）印刷予算にはJ-stageにアップロードする費用も含む。それを差し引いた金額で受託してくれる業者を探すことになる。

（質問）明日の総会で、学会費の値上げを将来的にお願いすることになると伝えた方が良いかどうか。

→言ったほうが良い。上がらなければそれでよいので、いきなりにしない方がよい。

## 7. 事務局報告

・ 会員異動

4人の移動が報告された（入会3 退会1）

・ 総会議案書の確認

(質問) 次回大会の開催時期はどのように記載するか。

→9月上旬としなくてよいか。

→9月開催予定で。

・ 編集の記載事項の確認

→投稿カテゴリーの見直しは完了した。

・ 研活の記載事項の確認と編集委員会主催のワークショップについて

→3月、6月と時期を明記しないことを希望する。

→編集委員会ワークショップを11月に開催するのは難しい。次期の人と相談することになる。

→削除の方が良いのでは？

→やってもいいのでは？

→削除する。

・ そのほかの確認事項について確認

→名誉会員制度が第9期に実現された。20周年にむけて奨励賞を導入したい。選考委員を早急に召集して体制を作る必要がある。

(質問) 学会賞の規定が決まったのは素晴らしい。しかし、JOHAは在野の人もある。年齢制限は妥当か？

→会員で優劣をつける事にも議論もでた。これは奨励賞、ということで(年齢制限を設けない)学会賞と区別したつもりではある。しかし、指摘を受けて改めて考えるところはある。

→対案を出すのは難しい。今後の課題として含みを持たせることはできないか。

→若手育成は大事な課題だと思う。しかし、年を経てからおこなう聞き取りにも大切な意味がある。リカレント教育の流れにも即している。国際学会でも年配の人が受賞している例があった。オーラル・ヒストリーの特性を考えると、年齢制限は妥当だろうか？

(質問) 原案では総会で変更を決定することになっているが、会則の改訂は必要になるのか？

→学会全体にかかわることなので、最初の一回は総会にかけたほうがいだろう。その後は理事会によって変更できるようにするのはどうか。

→(条文を変更)

(質問) 第三のカテゴリーとして、若手奨励賞を創設し、著書・論文にこだわらない、さまざまな評価をするようにした方がよいのではないか。

→最初は狭くして、後に広げていく方がよいのではないか。評価軸の難しさと負担増が大きい気がする。

→これからは新しい表現が沢山でてくると思う。会員による投票などもあり得るのでは。

→現在、私たちが考え得る業績が、著書と論文だった。これまでの積み重ねがそこに限られている。明日は、この2部門として提案したい。

→論文の対象は投稿論文に限っているので、すでにかなり制限できている。これに加えて年齢も限る必要はあるのだろうか。

→年齢制限を外して、あとで付け加えるのはどうか。

→むしろ年齢制限をつけて発足させて、その後に具体的問題が生じてきたら外す方向で検討すればよいのではないか。選考委員と推薦委員の体制など、いろいろな方法が考えられると思う。

→第2条については、可能性を開いていく方向で考えていると説明する。

(質問) スケジュールについて確認したい。

→受賞者の発表は顕彰する年の7月末としている。なるべく早くした方がいいだろう。今回の選考対象に、17号を含むようにしたい。なお、言語については、日本語とあえて明記はしていない。

## 8. その他

- ・連絡の取れない名誉会員について、次期理事会への申し送り事項となった。
- ・新理事には、メーリングリストに検討事項をおって送る。

## 次回理事会

日程：2021年 12月 12日（日）13:00～

# 第10期 第2回 JOHA 理事会 議事録

日時：2021年12月12日（日）13:00～16:00

場所：オンライン開催

出席：蘭信三、大門正克、酒井朋子、佐々木てる、佐藤量、佐野直子、清水美里、謝花直美、梶本歩美、野入直美、安岡健一、山田富秋、李洪章、和田悠

欠席：米倉律

議事録作成：佐藤量、梶本歩美

## 1. 会長より

佐々木会長から今季理事会の課題として、来年の第20回大会を記念大会としてどのように開催していくか、前理事会からの引継次項である奨励賞についてどのように進めていくのかという点が確認された。

## 2. 前回議事録確認

第9期・第10期の合同理事会の議事録について、出席理事によって確認、承認された。

## 3. 編集委員会報告

【報告者：佐野委員長】

- インターブックスから明石書店への変更について

継続審議となっていた出版社の変更について、インターブックスから明石書店に変更されたことが報告され、了承された。

- 3回の査読制度の継続

第17号から実験的に3回査読制度をしていたが、第18号でも継続することが報告され、承認された。

第 17 号で 3 回査読制度を導入した背景には教育的配慮があったが、その結果掲載数が増加したこともあり、第 18 号でも継続することとした（第 16 号は 4 本、第 17 号は 5 本掲載（5 本のうち、3 回目の査読後に通った論文が 1 本、ワークショップを経て通ったのが 1 本））。

- 論文の締め切りの前倒し

第 17 号で 3 回査読制度を導入したことにより、通常より刊行時期が遅くなってしまった。次号以降では 9 月刊行を目指すため、原稿締め切り期限を 2 月 20 日～3 月 7 日の期間に前倒しすることが提案され、承認された。なお締め切り期限の前倒しは第 18 号以降も継続する予定であることや、締め切りの前倒しは投稿論文のみが対象であり、書評などその他の原稿は対象外とすることも確認、承認された。

また理事からは、書評の規約について執筆要領と投稿規程にずれがあることが指摘された。『日本オーラル・ヒストリー研究』の執筆要領には書籍紹介（43 字×10 行以内）とあり、投稿規程には書評（43 字×100 行）と書籍紹介（43 字×10 行）となっている。今後編集委員会で規定の見直しを含め、継続審議とすることが確認された。

そのほかの意見として、他の学会では教育的査読を望むものは、早めに投稿してもらい、そうじゃない人は一般的な締め切りに投稿してもらおうケースもあることが紹介された。編集委員長からは、事務的な煩雑さから、今回は締め切りを 1 回に収めさせてほしいと考えるものの、今後参考にしたいと回答があった。

- 「いい論文を書くワークショップ」2022 年度の不開催

2021 年にはじめて「いい論文を書くワークショップ」を実施し、結果として第 17 号に論文 1 本が掲載された。教育的配慮による企画であったが、3 回査読制度で手厚い査読が今後も実施されることや、公開査読に対する倫理的な疑問などの意見もあり、今期の不開催が報告され、承認された。

#### 4. 研究活動委員会報告

【報告者：安岡委員長】

- 2022 年 3 月企画について

2022 年 3 月企画「聞き取りプロジェクトの実践とその残し方／使い方」（仮）の内容が報告され、了承された。プログラムは 2 部構成。第 1 部では、中村春菜氏（琉球大学）が、授業の聞き取り後に行なっている展示活動を事例紹介し、第 2 部では、安岡健一氏（大阪大学）と福山樹里氏（国立国会図書館）が、聞き取り後の資料保存をめぐるどのような問題を抱えているか紹介する。聞き取ること自体は多方面で取り組まれているが、集めた資料をその後どのようにしているのかについて考える機会にしたい。

- 次期大会（立教大学）での企画について

2022 年 9 月の次期大会での研究活動委員会の役割について、研活が何をどこまですべきかについての確認があった。研活企画としては「学問と社会とのつながり」に関する企画が提案されたほか、参加理事からは、20 周年の記念大会であることから JOHA を振り返る企画や、東アジアのオーラル・ヒストリーとして KOHA（韓国）や台湾とのネットワークをいかして海外からのゲストを呼んだ企画などの提案があった。

その上で、20周年記念の企画については、開催校企画ではなく JOHA 主催の企画とし、佐々木会長による会長企画とすることが承認された。会長企画の素案を年明けにも作成し、大会の半年前にあたる 2022 年 3 月には企画内容を決め、講演者に依頼するという段取りが確認された。また、開催校企画と研活企画の内容と役割分担については継続審議とし、今後のスケジュールは広報のタイミングを考慮して、メールで調整することが確認された。

- 今後の研究活動委員会企画について

2023 年 3 月には、蘭先生の科研とからめた東アジアのポストコロニアルをテーマとするシンポジウムを計画していることが報告された。また 2023 年 9 月の大会では、沖縄の占領体験をめぐる企画が計画されているほか、学校教育や市民教育とも連携した学会の社会貢献についても取り組んでいくことも報告された。

## 5. 広報委員会報告

### 【報告者：野入委員長】

ニューズレター用の原稿について、各委員会の原稿内容と提出期限が報告され、出席理事によって確認された。

## 6. 会計報告

### 【報告者：李委員長】

紀伊国屋書店から定期購読について問い合わせがあったことから、賛助会員制度について確認したい。紀伊国屋書店には賛助会員になるか、丸善を通して毎年納入することは可能と返答したが、その後連絡はない。今後のことも見据えて、賛助会員の詳細について事務局と過去の議事録を確認するとともに、購読会員も含めて検討する。

## 7. 事務局報告

### 【報告者：佐藤事務局長】

2021 年 9 月の大会から昨日までに 2 名の新規入会者があったこと、また 1 名から退会届が提出されたことが報告された。

## 8. その他

### 【報告者：佐々木会長】

佐々木会長から、第 9 期理事会からの継続審議事項である奨励賞の創設に関する報告と、今後の議論の進め方について提案がなされた。奨励賞の創設については、2021 年度大会総会（JOHA19）にて発議され、様々な意見が出されたため総会での採決は見送られ、継続審議となったが、本日（2021 年 12 月 12 日）時点で、前回大会の総会議事録が完成していない。第 9 期理事会において総会議事録の完成に向けた意見交換が継続していることが確認された。

それを踏まえて会長からは、今日は奨励賞の詳細をどうするか決める前に、まず理事からの意見を募り、特に年齢制限をどうするか中心に考える機会としたいと発言があった。その上で理事からは以下の



ような意見が出された。

→まず、年齢制限を外して基準を「研究期間」にするのはどうか。業績の期間を問うことにして、若手に限定しない。これにより、JOHA 全体を対象をひらいていくことになるのではないか。また、審査対象物については、まずは「著作」と「論文」にすべきではないか。そのうえで、段階的に「映像」なども検討するというのがあるのではないか。他の学会などでは、「映像」などは対象になっていないので、JOHA の独自性を打ち出すことにもなる。

→総会では、「奨励賞」ではなく「学会賞」をつくるという論点もあったと思う。60 歳になっても書く人がいるからだ。しかし 300 人規模の学会で、学会賞をつくるというのは、非常に大変。奨励賞を選ぶのがやっとなと思う。例えば他学会の規約にもあるような、「修士課程に入ってから 15～17 年」などとするのがいいのではないか。

→対象を若手に限定してしまうと、どうしても対象にならない人がでてくる。排除する人をつくらないということを考えるべき。この学会にふさわしいのは奨励賞だが、30、40 代から研究を始めた人を励ますためにも、年齢や性別で排除しないということを明記すればいい。

→評価基準が錯綜してくるのではないか。市井の人たちがコツコツやってきた素晴らしさと、JOHA でいい論文を書くというのが、かみ合っていない場合もある。さらに、映像作品の審査をめぐっては審査者の選定も議論になる。むしろ、『日本オーラル・ヒストリー研究』に掲載された論文に限定するのがいいのではないか。「著作」の場合は、読むにも審査するにも時間がかかる。来年 9 月の 20 回記念大会までに審査結果を出せるのか？

→次回の 20 回記念大会では、奨励賞等の創設は厳しいのではないか。慌てる必要はなく、じっくりと議論していく必要がある。

→奨励賞であれば、今後の学会の発展に寄与するという研究内容が重要ではないか。将来性があるか否かなど、年齢や研究期間を問わず、内容で判断するのがいいのではないか？

→キャリアの話は、教育研究機関に属していない人もいることが問題だった。であるならば、最初に刊行した本に対する first book prize にしたらどうか。

→日本移民学会の規約にあるように、将来の学会に寄与できるものという文言があるのがあるのいいのでは？子育てが終わった後に、一念発起して研究された方がいらっしやった、そのイメージを崩さないようにするためにも、創設者の方々の気持ちをくめるような形にしたらよいのでは？

→ここまでの意見をまとめると、年齢ではなく研究期間を限定する、研究期間は問わず内容で判断する、「著作」や「論文」以外の「映像」なども見据えつつ審査対象を考える、First Book Prize にする、規約の文言には JOHA 会員を排除しないということを書くべき、などがあつた。

→おおよそこれらの意見に共通していたのは、排除しないためにどうしたらよいかということではないか。最大公約数として、JOHA 会員を排除せずに奨励賞をつくるためには、規約の文言をどうしたらよいかを検討する必要がある。今後、臨時理事会を開いて規約を作成し、臨時総会か次の大会の総会で提案するのはどうか。

以上の議論を踏まえて、理事会執行部で規約の素案を作成し、臨時理事会（2022 年 1 月 23 日）を開いて審議することが了承された。

次回臨時理事会：2022 年 1 月 23 日（日）13:00～

## IV. お知らせ

### 1. JOHA 研究実践交流会 シリーズ「つながるオーラル・ヒストリー」第1回のお知らせ

学会の皆さん、こんにちは。第10期研活委員会では、「つながる」をテーマに企画をつくっていきます。今回はその第一弾になります。学会内外の皆さんと交流したいので、ご参加、地域で聞き取りにとりくむ方へのお声がけをよろしく願いいたします。大会の企画も準備中ですので、お楽しみに。(安岡健一)

【企画名】 JOHA 研究実践交流会 シリーズ「つながるオーラル・ヒストリー」

第1回「聞き取りプロジェクトの実践とその残し方／使い方—図書館・資料館とつながる—」

【開催日】 2022年3月19日(土曜日) 14:00~17:00

【形式】 オンライン ※要事前登録

後日、学会メーリングリストおよびウェブサイトでご告知いたします。

近年、「まちづくり」をはじめ様々な目的で、研究者や市民など多様な主体によって聞き取りプロジェクトが取り組まれています。日本オーラル・ヒストリー学会は、聞き取りに取り組む皆さんの交流を促進するとともに、より充実した活動が実現できるよう貢献することを目指して、「つながる」をテーマに企画を準備しています。

現在各地での聞き取りをつうじて生みだされている作品や展示、記録集は大変意義深いものです。しかし、その素材となった貴重な口述資料は、プロジェクトやイベントが終わったあとどうなっているでしょうか。地域にある資料保存にかかわる機関とつながり、シンプルな手順を踏むことで、保存し、将来的に活用できる可能性があります。

今回の研究実践交流会では、聞き取りプロジェクトの実践をどのように「残し／使う」につなげるかに光をあてます。二部構成の第一部では実例として、沖縄県中城村で大学と社会教育施設が協力して取り組んだ、戦後引揚に関する聞き取りプロジェクトについて主催者から解説をいただき、その資料の保存と活用可能性について研究者と図書館員が報告します。

第二部では、参加者の皆さんが実際に取り組んでいるプロジェクトや研究について、情報交換と課題の掘り起こしをおこないます。自分たちの取組を伝え、また他の地域の取組を知り、聞き取りを未来に残すための課題を掘り起こしていきましょう。かけがえのない語りを残していくために、今、何ができるかを共に考え、理解を深めていきたいと思えます。

研究者だけでなく、聞き取りに関心を持つさまざまな立場の方の参加を歓迎します。

#### 第一部 実例・話題提供 (予定)

久場崎の戦後引揚プロジェクトとその語りを残し、使うために (仮)

中村春菜 (琉球大学)・安岡健一 (大阪大学)・福山樹里 (国立国会図書館)

## 第二部 参加者自身の実践と残し方

自己紹介と、意見交換

## 2. 『日本オーラル・ヒストリー研究』18号原稿募集 投稿規定

論文、研究ノート、聞き書き資料、書評、書籍紹介の原稿を募集いたします。投稿希望者は学会ホームページで公開されている最新版の投稿規定・執筆要領を参照の上、以下の編集委員会メールアドレスまで原稿をご送付ください。投稿に関するお問い合わせも下記アドレスまでお願いいたします。提出原稿は査読審査を経たのち、6月下旬ごろに掲載の可否が決定します。

### ○ 募集期間：2022年2月20日（日）～3月5日（土）

※~~必ず~~切が17号から2週間早くなります。お間違えのないようお気をつけください。

※メールの送信ミスや誤配の可能性があるため、募集期間を設けています。余裕を持ってご送付いただきますようお願いいたします。

○ 問合せ・応募原稿送付先：joha.editors(at)gmail.com（(at)部分を@に替えて送信してください。）

投稿規定・執筆要領最新版を熟読のうえ原稿を作成するようにお願いいたします。投稿規定・執筆要領に従っていない原稿は受理できません。

### 『日本オーラル・ヒストリー研究』投稿規定

投稿者は投稿規定・執筆要領を熟読のうえ原稿を執筆してください。また、最新版を学会ホームページに掲載しているので、必ず確認してください。投稿規定・執筆要領に従っていない投稿は受理しません。

- ① 投稿は会員に限ります。まだ会員でない方は、投稿する前に入会の手続きを済ませてください。なお、入会申込書の受理・会費の納入確認をもって入会手続きは完了します。
- ② 投稿原稿は原則として日本語か英語によるものとします。
- ③ 投稿は下記のカテゴリーで未発表のものとし、それぞれ規定の文字数で執筆してください。  
なお、表題、英文要旨（論文のみ）、見出し、図表、注、文献リスト等も文字数に含みます。
  - ・論文 16,000字～28,000字以内
  - ・研究ノート 18,000字以内
    - ※研究の中間報告、予備的考察や試論、研究の着想など、論文の形式には収まらないけれども発表する意義があるもの。
  - ・聞き書き資料、実践報告、研究動向（国内外・回顧と展望）、資料紹介、書評論文等 18000字以内
    - ※編集委員会が適当と判断したものも、受け付けます。

・図書紹介 2,000字以内

※会員の自著紹介を歓迎します。また、非会員の著書も歓迎します。

(英語論文に関しては執筆要綱を確認、その他は編集委員会に確認してください。)

- ④ 論文の英文要旨は200語未満とします。英文の表題と要旨については、希望者には掲載決定後に編集委員会を通じ、校閲作業を依頼します。ただし、この作業にかかる費用は投稿者の自己負担とします。
- ⑤ 原稿は、執筆要領にしたがって、MS Wordによる横書きとします。審査用の原稿は、Wordファイルおよびpdfファイル両方のデータを下記の編集委員会のメールアドレスまで電子メールに添付して送付ください。原稿のファイル名は「投稿の日付け\_投稿者氏名(ローマ字表記)」とします。  
例) 20220301\_johataro.doc
- ⑥ 投稿者は別ファイルに、氏名、郵便番号と住所・電話番号、メールアドレス、所属機関と電話番号、投稿のカテゴリーを明記し、電子メールに添付してください。ファイル名は「投稿者」の氏名(ローマ字表記)とします。  
例) johataro.doc
- ⑦ 投稿原稿は原則として査読審査を経て、編集委員会が掲載の可否を決定します。また、審査は匿名で行います。したがって、「拙著」「拙稿」などの表現や、研究助成、共同研究者への謝辞など、執筆者と所属機関が特定できる情報は審査用原稿に記載してはいけません。ただし、掲載決定後に送っていただく完成原稿で修正・追記することができます。
- ⑧ 本誌に掲載された論文等は、原則として本誌発行1年後に電子公開します。掲載原稿の著作権の一部(複製権・公衆送信権)を、日本オーラル・ヒストリー学会に譲渡していただきます。著書などに転載する場合や、機関リポジトリ等へ電子データを搭載する場合には、必ず本会の許諾を得てください。
- ⑨ 当該論文の抜刷は、別途、有料にて制作可能です。ただし、50部単位とし、抜刷の希望者は、初校返送時に編集委員会に申し出てください。

原稿送付先： 日本オーラル・ヒストリー学会編集委員会

joha.editors(at)gmail.com

日本オーラル・ヒストリー学会編集委員会

酒井朋子・佐野直子・梶本歩美・米倉律・山田富秋

### 3. 会員異動 (2021年9月5日～2022年1月20日)

#### ① 新入会員 (入会順)

- 王石諾 (大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程)
- 大木紗英子 (北海道大学大学院文学院修士課程)
- 稲毛和子 (立教大学平和・コミュニティ研究機構事務局等)
- ウォーターズめぐみ (翻訳家・著述家・リサーチャー)
- 大川ヘナン (大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程)
- 波照間永子 (明治大学 情報コミュニケーション学部・准教授)

## ② 退会

- 原口和子

\*連絡先（住所・電話番号・E-mail アドレス）を変更された場合は、できるだけ速やかに事務局までご連絡ください。

（事務局長 佐藤量）

## 4. 2021 年度（2021 年 4 月 1 日～2022 年 3 月 31 日）会費納入のお願い

平素は学会運営へのご協力、まことにありがとうございます。本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金のほどよろしくお願いいたします。

会費のご納入につきましては、8 月末日までにお願ひいたく存じます。学会誌の一斉発送の時期を過ぎますと、ご納入確認がとれた後に、個別に学会誌発送手続きをとらせていただくことになり、事務局の作業負担の増大につながります。ご理解のほどよろしくお願ひいたします。

また、一部ですが、2020 年度・2019 年度分についても未納の会員がいらっしゃいます。こちらも早めの入金をよろしくお願ひいたします。

なお、所属機関名義で振り込まれる場合は、別途、会計宛に入金した旨をご連絡ください。

### ■年会費

一般会員：5000 円 学生・その他会員：3000 円

\*「学生・その他会員」の「その他」には、年収 200 万円以下の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に振込票等にその旨明記してください。

\*年会費には学会誌代が含まれています。

### ■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

\*払込取扱票（ゆうちょ銀行の青色の振込用紙）の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

\*従来と記号・番号は変わりありません。

### ■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店名：〇一九（ゼロイチキュウ）

店番：019

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名（受取人名）：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便振込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必要に応じて個別に領収書も発行させていただきますので、その際にご連絡ください。

その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の李（leehj(at)css.kobegakuin.ac.jp）までお問い合わせください。

（会計 李洪章）

.....

## 日本オーラル・ヒストリー学会

### Japan Oral History Association (JOHA)

\*\*\*\*\*

JOHAニューズレター第41号

2022年1月20日

編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学大学院 先端総合学術研究科

佐藤量 宛

日本オーラル・ヒストリー学会事務局

E-mail joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp

\* 郵送またはメールでのご連絡をお願いいたします。

\*\*\*\*\*